

# 横浜水道 130 年の歩み

平成 29(2017) 年は、横浜に近代水道\*が創設されてから 130 年を迎える節目の年です。横浜の水道は創設以来、お客さまのご理解とご協力をいただきながら発展してきました。現在では、蛇口をひねればすぐに水が出ますが、当たり前のように水道が使えるようになるには先人たちの努力がありました。

\*近代水道とは川などから取り入れた水をろ過し、鉄管などを用いて有圧で給水する水道のことです。

## 1 近代水道創設 明治 20(1887)年

開港後の横浜の水需要を改善するため、神奈川県知事は英国人技師ヘンリー・スペンサー・パーマー氏を顧問に迎え、当時のヨーロッパの最新技術を取り入れた日本で最初の近代水道建設に着手し、明治 20(1887)年に給水を開始しました。(明治 20 年 計画給水人口 7 万人)



英国人技師  
H・S・パーマー氏



明治 20 年に工事が完了して、吉田橋(中区)で行われた消防出初式の様子



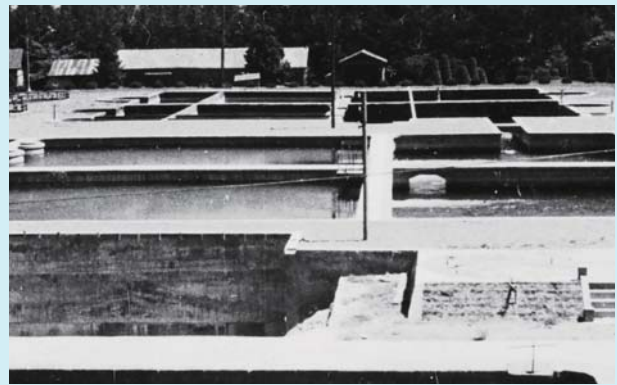
横浜停車場(現在の桜木町駅)前の創設記念噴水塔

## 2 第 1 回、第 2 回拡張工事 明治 30(1897)年~大正 4(1915)年

給水計画を上回る人口増加に対応するため、明治 30(1897)年から明治 34(1901)年まで第 1 回拡張工事を行って川井浄水場を築造しました。その後も市域の拡大に伴い人口が増加し、日露戦争を契機に工場用の水需要が急増したため、続く第 2 回拡張工事では西谷浄水場が大正 4(1915)年に完成しました。(大正 4 年 計画給水人口 80 万人)



山手で行われた配水管工事の様子(明治 30 年頃)



第 1 回拡張工事で築造された川井浄水場(明治 34 年頃)

### 3 関東大震災と太平洋戦争による被害 大正 12 (1923) 年～昭和 20 (1945) 年

増加する水需要に対応していった横浜の水道ですが、大正 12 (1923) 年の関東大震災により、野毛山配水池などの施設に壊滅的な打撃を受けました。また、昭和 20 (1945) 年の横浜大空襲で横浜は再び甚大な被害を受け、水道施設などにも大きな被害を受けました。その後、資材の高騰、工期の延長などの困難を乗り越えて、昭和 22 (1947) 年には相模ダムが完成するなど復興に向けて力強く歩み出しました。(昭和 20 年 戦災後の給水人口 22 万人)



関東大震災で被害を受けた鮎子取水せき



野毛山 1 号配水池の惨状



関東大震災復興後の野毛山配水池

### 4 高度経済成長期と水需要の増加への対応 昭和 31 (1956) 年～昭和 55 (1980) 年

戦後の産業発展に伴い、水需要も著しく増加しました。また、昭和 39 (1964) 年には全国的な異常渇水に見舞われ、オリンピック渇水と呼ばれました。これらに対応するため、第 5 回拡張工事 (昭和 31 年～昭和 36 年) から第 8 回拡張工事 (昭和 46 年～昭和 55 年) までを相次いで実施し、鶴ヶ峰浄水場と小雀浄水場の建設、および西谷浄水場の増強を行いました。また、城山ダムなどの新たな水源の開発も行われました。(昭和 55 年 計画給水人口 299 万人)



昭和 36 年頃の鶴ヶ峰浄水場  
(現在は廃止、配水池として築造中)



第 6 回拡張工事で築造された小雀浄水場  
(昭和 39 年完成)

### 5 宮ヶ瀬ダムの本格稼働～現在 平成 13 (2001) 年～平成 29 (2017) 年

宮ヶ瀬ダムの本格稼働により、安定給水ができる水源と施設が整いました。そして、現在は老朽化した施設の更新や大規模地震に備えた耐震化、水需要の減少に伴う水道施設規模の適正化を行うなど「更新・再構築」の重要性が高まっています。平成 26 (2014) 年には、川井浄水場を自然エネルギーを活用した国内で最大規模の膜ろ過方式の浄水場に再整備し、これに伴い鶴ヶ峰浄水場を廃止しました。(平成 29 年 計画給水人口 375 万人)



平成 13 (2001) 年に本格稼働した宮ヶ瀬ダム



川井浄水場の膜処理装置 (セラロック)

横浜市水道局は、これからも川井、西谷、小雀の 3 つの浄水場や約 9,200km に及ぶ水道管など施設の維持管理を適切に行い、24 時間 365 日安全で良質な水を安定してお客さまにお届けします。